

新・農業経営者ルポ／第212回

主婦目線、母親目線で届ける 平地平飼い卵と極上スイーツ



岡山県で平地平飼いをする養鶏場の(株)卵娘庵の代表取締役、藤井美佐(56)。「鶏ファースト」を掲げ、鶏舎を学校に、約7500羽の鶏を社員に例えながら、わが子のように慈しみ、飼育する。主婦として、母親としての経験やアイデアを生かした発信力で、子育て世代の共感を呼び、卵娘庵のファンを増やしながら経営を続けている。

文・写真／筑波君枝、写真提供／卵娘庵

平飼い鶏舎に入学してくる 生後100日齢の女子と男子

岡山県井原市の山間部にある卵娘庵の鶏舎に、新しい雛がやってくる(入雛)と入学式が行なわれる。入学してくるのは生後100〜120日齢の大雛。雛は卵を産む巣箱を通って鶏舎に入っていく。これが入学式だ。雌は女子社員、雄は男子社員と呼ばれる。

鶏舎は女子社員ばかりの女子校と、男子社員が1割ほど混ざる共学とに分かれ、共学鶏舎の卵は有精卵として販売されている。最初は農場スタッフによるオリエンテーションが行なわれ、止まり木など高い場所に入る練習をさせる。

女子社員たちは130日齢くらいから卵を産み始めるが、巣箱で産卵することもしっかりと指導する必要がある。巣箱以外で産み落とした卵は、巢外卵として加工用に回さなければならぬためだ。

卵を産みそうな様子を見せると、「ここで産んじゃだめ」と巣箱に誘導するのだという。

産んだ卵を抱卵しようとする女子社員も時々いる。そんなとき、「あんたは最後まで温められんじやる」と話しかけながら取り返す。鶏と接しているとそんなひとり言が増え、子育てをしているような気持ちになると藤井は話す。

「愛情を込めて育てていますが、 苦手なものは苦手です」

卵娘庵は「鶏ファースト」を掲げ、平地平飼いで約7500羽を飼育する養鶏場だ。鶏は、ビジネスパートナーであると同時に大切な子どもたちでもある。家畜の健康的な飼育方法を目指す、アニマルウェルフェアの考え方に基づいた養鶏を実践している。

鶏種は愛媛県産のポリスブラウン。殻色が均一な赤玉鶏だ。穏やかな性格で採卵鶏に向いている。



鶏の1日を学校に例えて紹介している。
このイラストもスタッフの手によるもの

開放鶏舎で太陽光をいっぱい浴び、土を掘り、砂遊びさせながら健康に育てることがモットー。より自然に近い環境で育った鶏が産んだ新鮮な卵と、その卵で作った加工品を届けることが経営の使命だ。

共学鶏舎も卵を有精卵として売り出したのはここ数年のこと。当初は鶏のストレス軽減のために雄鶏を入れていた。

「鶏は群れで暮らす動物なので、雄がいると鶏舎が安定するんです。雄にはいつも雌が数羽、寄り添っているんですよ。女子校では雌がボスになって雄みたいに鳴いたりもします。『え？ ここ女子校なのに男子の声がする！』と驚

らんこあん
(株)卵娘庵

代表取締役

藤井 美佐 岡山県岡山市

ふじい・みさ 1965年、京都府生まれ。高校卒業後、ホテル勤務を経て、藤井浩太郎と結婚。2人の子どもに恵まれる。夫が継承した養鶏場の危機を救う形で(株)卵娘庵の代表取締役に。おかやま農業女子プロジェクトの副会長も務める。ちなみに、美佐の名の由来は12月25日生まれだからだという。



鶏舎内の土は休ませている間に発酵させ殺菌するため、ふかふかで匂いもない

今度は筆者が驚く番だ。

最初は鶏舎に近寄るのも怖かったそう。さすがに社長としてそうも言っていられないので、ずいぶん慣れましたと笑う。とはいえ、未だに鶏に触ることはできない。集卵などの作業も、鶏と目が合わないようにするという。

「見ているとかわい顔しているなと思いますし、1羽ずつ個性があつて『何をしておるんじやろ』と、楽しくもなります。

愛情たっぷり育てているんですけれど、触るのは無理。正直なことを言うと、なんでこんなことになったのか、わからんですよ」

祖父の養鶏場を嫁さんとして手伝ったことが始まり

鶏が苦手な藤井がなぜ卵娘庵の社長となったのか。

卵娘庵の前身は夫、浩太郎(60)の父である祖父が経営していた養

鶏場だった。夫は会社員で、最初は「養鶏は継がない」と話していたという。実際に結婚してすぐは夫の仕事の関係で横浜に住まいを置いた。その後、大阪勤務を経て、岡山の企業に転職した。

その時点でも継ぐ予定はなかった。しかし、近くに住むと頻繁に養鶏場の様子を見に行くようになり、すると経営状況も気になるようになり、ゆくゆくは自分が継がないとならないと考えるようになったのだという。ならば早いうちにと、1995年ごろから本格的に養鶏場を手伝うようになった。

そのころ、藤井はファーストフード店でパートをしていた。高校時代のバイト経験も含め、ファーストフード店での勤務歴は長く、接客業が楽しかった。しかし、夫が経営に関わると「嫁さん」として手伝いをせざるを得ない状況になったそうだ。

運命が大きく変わった瞬間だった。結局、営業や販売ならと加工部門を藤井が担当するようになった。接客業も長く、明るくポジティブに物事を捉える性格が営業に向いていたのだろう。売り先を広げ、大手百貨店との取引も始まった。プリン製の品化も決まり、さら

に鶏肉の開発が検討されと、藤井が担当する加工部門は順調だった。

廃業が経営維持かの選択を迫られ、社長に

ところが、そのころ、養鶏場では深刻な問題が持ち上がっていた。鶏舎の老朽化やイノシシなどの獣害がひどく、このままでは経営を維持できないと廃業が検討されていたのだ。

「当時は経営にタッチしていなかったもので、辞めなきゃいけないとは想像もしていませんでした。営業先で『売れているよ』と声をかけられることも多くなり、いろいろな話も進んでいるときでしたからなおさら。しかも、自ら営業をして決めてきた話なので、『今さらやめられんよ』と言ったんです」

ではどうする?と話し合いを重ねた。「やるなら応援するよ」と多くの取引先が言ってくれたことにも背中を押され、加工部が独立する形で個人商店を立ち上げ、卵と鶏肉を全量買い上げて販売することになった。そしてその半年後、養鶏場と個人商店が一緒になる形で法人化し、(株)卵娘庵が設立された。2015年のことだった。「夫は養鶏場の役員だったので、

いてしまうくらい」

藤井は鶏の様子を、本当に楽しそうに話してくれる。その口調からは、鶏を慈しみながら育てていることが伝わってくる。そう思っていると、藤井はこう切り出した。「でもね、実は私、鳥が怖いんです。カラスやスズメも怖い。鶏なんて一番苦手だったんですよ。コッコ、コッコと鳴く声もダメ」「へ? そうなんですか?」

卵娘庵の社長を兼任することはできずに、結果的に私が社長になるしかありませんでした。そもそも嫁さんの手伝いだっただははずなのに、『え？ あたしが社長？』っていう気持ちでしたよ」

ただ夫は女性を中心とした部門を作る構想を、以前から練っていたという。卵娘庵の名前も夫からの提案で、法人化の前から考えていた。

「卵を産む娘の小屋という意味を込めたそうです。すぐに覚えてもらえますし、アルファベットで表記してもかわいいので気に入っています。なんて読むの？と聞かれることが多いのですが、そういった疑問から興味を持っていただけるとのいいなと思います」

社員は現在、事業部門を担当する夫と、養鶏場の農場長、GPセンター（卵の選別包装施設）、事務兼営業の4名。ほかにパートスタッフが直売所やカフェを含め15、6名常時いる。

空飛ぶ卵を産む鶏舎が壊滅的な被害に

祖父が経営していたころ、養鶏場ではケージで約3万羽を飼育していた。しかし、狭いケージの中

で、卵を産ませるだけの養鶏に疑問を感じ、2005年ごろから鶏舎内を自由に歩き回れる平地平飼いへと変え、数を減らしていったそうだ。

現在は7500羽前後を飼育している。3000羽収容の鶏舎3棟で、1棟を2群に分けて飼育し、常に1500羽分のエリアを休ませながらローテーションしている。この3棟に至るまでも紆余曲折

があった。

養鶏場は山の農場と川の農場との2カ所に分かれ、それぞれ2棟、合計4棟あった。平飼いに切り替えてからは4棟で約9000羽を飼育していた。人里離れたところで鶏の楽園を作りたい。祖父にはそんな構想もあって選んだ場所だという。

山の農場は文字通り山の上であり、川の農場は川を渡らないと行

けない場所に立地していた。川の農場へは獣道のような道しかなく、車は使えない。エサや卵は川に設置されたゴンドラに載せて運んでいた。ゴンドラが卵を運ぶ様子から「空飛ぶ卵」と命名していたこともある。しかしここは採算を取るのが難しく、赤字農場とも呼ばれ、そう遠くない時期に辞めなければいけないと考えていたという。





川の農場に行くためのゴンドラ



かわいいデザインが目を引く社用車

そこに2018年7月、西日本豪雨が襲った。ゴンドラが壊れ、2棟のうち1棟が壊滅的な被害を受けてしまった。幸い被害を受けた1棟は休んでいる時期で鶏がいなかったため、約4000羽の鶏は無事だった。しかし、ゴンドラが壊れ、スタッフが川を渡って農場に行くしかなかった。手立てがなく、充分な量のエサを与えることができなくなってしまう。

西日本豪雨災害によって もたらされた改善

その後、豪雨災害の補助金などを

生き延びた4000羽は、卵を最も産む時期だった。しかし、暑さと豪雨の被害で、卵を産まなくなり、損害は大きかった。それでも鶏のために、いの一羽に川の農場を修繕し、最後の1羽が出ていくまで面倒を見た後、川の農場は閉めることにした。

ものを見直すことができたためだ。卵娘庵では豪雨災害までは、鶏を700日齢まで飼育していた。しかし、羽数を減らしたことを契機に、思い切って550日齢と短くした。すると、7500羽でも9000羽に近い生産量が確保できたという。これまでは産卵率が落ちた鶏舎に、かなりの数の産まなくなっていた鶏がいたにも関わらず、飼育し続けていたことがわかった。

利用し、山の農場の空いていた土地に3棟目を建て、飼育数も9000羽から7500羽に減らした。「損害は大きかったのですが、災害によって気づかされたことも多く、経営の改善にもつながりました」

「回転を速くしたことで、9000羽に近い生産量が確保でき、『なんだ！これでよかったんだ』と気づいたんです。それまでは2カ所で養鶏をしていたのを1カ所に集約したため、作業の効率もよくなりました。豪雨災害は本当に大変でしたが、それをきっかけに改善できたので、ありがたいと捉えようと思えました」

大きな養鶏場なら設備投資によって規模を拡大することで経営を安定させることができるだろう。しかし、小規模経営に同じことはできない。効率を上げ、卵の質を上げ、付加価値を付けていかなければ、付加価値を付けていかなければ、限り大手には勝てない。西日本豪雨の被害は、改めてそれを考えるきっかけとなった。

子どもたちにどんな卵を 食べさせたいですか？

取材中、藤井は何度も「発信」という言葉を口にした。「大量生産ではないからこそ、積極的に発信していかないとダメだと思うんです」

物価の優等生ともいわれる卵は、現在でも、1パック10個で200円前後が一般的だ。対して卵娘庵の平飼い卵は、発売したばか

主婦目線、母親目線で届ける平地平飼い卵と極上スイーツ



無印良品とコラボして作った人気のエコバッグ



リンゴの木箱を利用したディスプレイは、藤井の知人たちが作り、飾ってくれたもの



岡山の個性豊かな「うめえもん」として認定されている



卵黄たっぷりの「本気かすてーら」、卵の風味が生きた「ひよせん」、
「ひよぼ〜ろ」など卵娘庵自慢のスイーツ

りのころも6個で200円台、1個当たり40〜50円だったため、なかなか売れなかった。平飼いやアニマルウェルフェアの認知度も低く、どう売るといいかわからず、最初はとても苦労したという。

そこで力を入れてきたのが、藤井が先頭に立って顧客のニーズを模索しながら、「子どもや家族にどんな卵を食べさせたいですか?」と、主婦目線、母親目線で発信していくことだった。

エサは配合飼料と牡蠣殻が中心の自家配合。それを食べてストレスの少ない平飼いで育った鶏の卵

は、濃厚で臭みがない。黄身にはコクがあり、弾力のある白身には甘みも感じられる。その安全性やおいしさをアピールしてきた。さらに主婦として母としての経験やアイディアを詰め込んだスイーツの開発・製造にも取り組んできた。

「作っているのは私が子どもや孫に食べさせたいおやつ。だから、素材も吟味していますし、それが伝わるように発信しています」

味だけではなく、平飼い卵と一般的な卵ではどう違うのか。カロリリーは5%、コレステロールは10%、脂質は25%、糖質は35%低いこと、さらにビタミンは高いことなど、卵の成分の含有の違いなども具体的な数値を盛り込んで発信している。それらが功を奏し、卵娘庵の卵の認知度が高まり、平飼いの価値に共感してくれる顧客も

増えてきたことを実感している。

鶏の恵みである卵を 野菜コーナーに置きたい

よりたくさんの人に卵娘庵の魅力を伝えようと、2020年11月にはJR早島駅前の早島町観光センター内に「こひよ」もオープンさせた。オープンにあたって想定した顧客層は35歳の子育て中のママたち。駅前という立地の良さと幼稚園バスの停留所が目前にあることもあり、地域の女性たちに人気の店となっている。

こひよは移築された蔵の一角に

主婦目線、母親目線で届ける平地平飼い卵と極上スイーツ



カフェで人気があるのは
数量限定の
「たまごかけごはん」

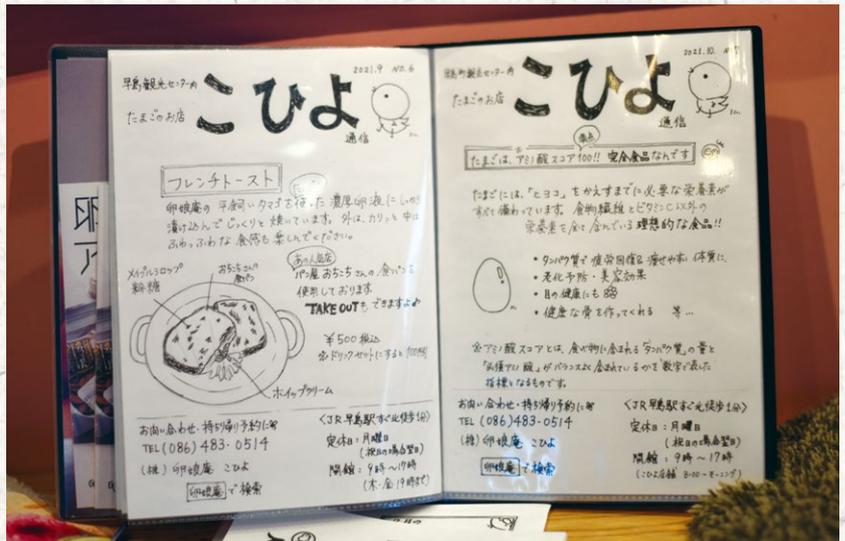


2階のカフェ

あり、1階は卵産の卵や加工品、さらにはおかやま農業女子つながりで知り合った農場の加工品などを販売する。2階は卵産の卵やスイーツが楽しめるカフェ。ここでは卵産の卵を使った食育のワークショップも開いている。

指すのは野菜コーナーで販売できない卵だ。「卵は加工品として販売されています。工場のような養鶏場で作るのです、確かに加工品だといえるでしょう。でも、卵は鶏の恵み。加工品ではなく、農産物なんです。農産物として野菜コーナーで売られるような卵を生産していきたい」

また、今は忙しくて手が付けられないが、ゆくゆくは川の農場を観光農園のような形に変えたいという。「山があつて、川があつて、夏にはホタルが飛ぶような自然豊かな場所です。息子たちも小さいころはよくゴンドラに乗って遊んでいました。ここで子どもたちがのびのびと遊びながら、この美しい所に養鶏場があり、そこで育った鶏の安全でおいしい卵が卵産の卵だよと伝えられるような場にした



スタッフが手書きで作る「こひよ通信」。
かわいいイラストと手書きの文字が人気だ



JR早島駅前にオープンした「こひよ」

いのです」
人里離れたところで鶏の楽園を作りたくて描いた祖父の思いが、違う形で実現しそうだ。
「嫁さん」から女社長へ。思いもよらなかつた転機を笑顔で乗り越えてきた藤井。主婦として、母親としての経験に裏打ちされた発想と発信力で、これからは新しい扉を開いていくことだろう。

(敬称略)